

論 説

離島地域を対象とした フィールドワーク実習の実践と課題 -八幡浜市大島地区を事例として-

片岡 由香¹・松村 暢彦¹ (環境デザイン学科)

A Practice of Fieldwork Studies in Detached Islands and its Challenges
-A Case Study in Oshima Islands, Yawatahama city-

Yuka KATAOKA (Department of Environmental Design)
Nobuhiko MATSUMURA (Department of Environmental Design)

キーワード：フィールドワーク実習、ステークホルダー、離島、八幡浜市
Key Words: field work, stakeholder, detached islands, yawatahama city

【原稿受付：2020年1月9日 受理・採録決定：2020年1月23日】

要旨

愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科の3年次に配当されている授業科目「環境デザインフィールド実習Ⅱ」は、事前文献調査およびステークホルダーへのインタビューおよび議論に基づいて、地域社会が抱える問題を理解し、地域課題の解決に向けて導いていくことができるような調査の実施や提案などを目標にフィールドワークに取り組むものである。2018年度は愛媛県八幡浜市の離島である大島地区を対象として、地域の問題を考え、課題を設定し、地域のステークホルダーの協力を得ながら、調査を実施し、考察を行った。本稿は、環境デザインフィールド実習Ⅱにおいて、その実践内容を報告するとともに、今後、同様のフィールド実習を実施する上での課題を考察するものである。

1. はじめに

愛媛大学社会共創学部は、「さまざまな地域社会の持続可能な発展のために、多様な地域ステークホルダーと協働しながら、課題解決を企画・立案することができ、地域社会を価値創造へと導く力」をもった学生を社会に送り出すことを目的としており、環境デザイン学科3年次に「環境デザインフィールド実習Ⅱ」(以下、実習)の授業が配当されている。本実習は、環境デザインに関する地域社会が直面する課題を取り上げ、フィールド調査を通じて課題を明らかにし、それらの課題を検討するための専門的知識を習得することを目的としている。また、実習地に関する事前文献調査およびステークホルダーへのインタビューおよび議論に基づき、地域社会が抱える問題を理解し、地域課題の解決に向けて導いていくことができる対話力を身につけることを目指している。

本稿では、本実習の実施内容と学生らの学びの視点

からみた課題について報告するものである。

2. フィールドワーク実習の内容

2-1 実施概要

2018年の第3クォーター(9月20日(木)～9月22日(土))の期間に、2泊3日の期間で実施した。実習の対象地として、愛媛県八幡浜市の宇和海に位置する離島部大島地区を選定した。本実習には、環境デザイン学科35名(環境サステナビリティ15名・地域・防災20名)の学生が参加し、教員2名が引率した。

実習全体の流れは表-1の通りである。事前準備として、担当教員2名(筆者ら)が、八幡浜市役所や実習地である大島地区のステークホルダー(区長、公民館館長、主事、民宿経営者、大島テラス関係者、地域おこし協力隊ら)に本実習の主旨や実施予定内容について説明をし、学生らの調査への協力や現地発表会に参加いただけるように依頼を行った。なお、島民への

周知に関しては、チラシを作成し全戸配布を依頼した。

表-1 実習の流れ

日程	実施内容	実施場所
6/21	地域のステークホルダーと教員の事前協議	実習地
7/25	大島地区地域おこし協力隊による講義	愛媛大学
9/20	ガイドダンス、各チームによる現地調査	実習地
9/21	各チームによる現地調査	実習地
9/22	大島地区での現地発表会	実習地

また、大島地区について理解してから実習に臨めるように、現地を担当している地域おこし協力隊に依頼し、愛媛大学にて大島に関する講義を実施していただいた。講義の内容は、大島地区の歴史、産業、伝統文化、現在の暮らしの様子や実習前に開館する交流拠点「大島テラス」に関する説明などであった。

実習は2泊3日と短期間であり、現地での活動の行程表は表-2の通りである。現地での実習がスムーズに進むように、予め調査テーマやグループ分けを行なった(表-3)。調査テーマやグループが事前に分かっていれば、実習前の打合せや調査テーマに関する下調べを行なうことができるからである。

表-2 実習当日の行程表

1日目 (2018年9月20日(木))	
8:30	愛媛大学 出発
10:20	八幡浜市、道の駅みなと着
11:30	定期船発 (大島行)
11:52	大島着
12:00	昼食 (持参もしくは大島テラス)
13:00	オリエンテーション、グループ毎に調査開始
17:00	夕食準備
18:00	夕食(自炊)
2日目 (2018年9月21日(金))	
7:00	起床、朝食(自炊)
8:30	フィールドワーク実施
12:00	昼食 (大島テラスで準備)
13:00	フィールドワーク実施
17:00	夕食準備
18:00	夕食(自炊)
3日目 (2018年9月22日(土))	
7:00	起床、朝食(自炊)
9:00	現地発表会、後片付け
11:30	昼食 (島の方々と交流会)
13:30	定期船発 (八幡浜行)
13:52	八幡浜港着
15:00	八幡浜市出発
16:50	愛媛大学着、解散

方法としては、インターネットの情報や地域おこし協力隊による愛媛大学での講義内容から、各自が大島地区について関心のあるテーマや調査したい内容について教員に提出し、近いテーマの学生ごとにグループ分けを行なった結果、全11グループとなり、各グルー

プの構成員は3~4名であった。以降はグループワークによって各テーマによる調査計画の作成を行い、調査目的や方法について担当教員が指導を行なった。

実習当日は生憎の雨天であったが、グループ毎に島内を歩きながら、調査計画の内容を予定通り実行した。当日の実習体制としては、担当教員が各チームを巡回して進捗状況の把握や調査の進め方などについて適宜指導を行ない、行政への質問などについては、八幡浜市役所の協力をいただきながら進行した。

実習最終日には各チームが取組んだ調査や提案内容について評価や意見を得るため、大島地区のステークホルダー、島民の方々および八幡浜市役所職員に集まいただき最終発表会を実施した(表-1)。実習後には、得られた調査結果についてチーム毎に報告書にまとめ、製本した報告書を大島地区の住民をはじめとする実習に強力いただいたステークホルダーに配布した。

表-3 各グループの実習テーマ

	実習テーマ
1	特産品のブランド化に関する調査
2	大島の定期船に関する調査
3	大島の環境問題に関する調査
4	島民の生活満足度に関する調査
5	空家問題に関する調査
6	伝統行事に関する調査
7	大島テラスに関する調査
8	大島の食文化に関する調査
9	大島の防災に関する調査
10	大島の観光に関する調査
11	大島の将来ビジョンに関する調査

2-2 実習地概要

本実習の対象地として選定した愛媛県八幡浜市大島は、約350年前に開島された八幡浜市の沖合南西約12kmに位置する有人島である。面積は0.75km²で、人口は230人(約132世帯)、産業は漁業と農業の半農半漁であるが、島内では青海苔等の養殖も行なわれている。かつてはイワシ漁で栄え、昭和40年代頃は毎年約2万人近くの海水浴客で賑わった。本土から大島へのアクセスは、一日3往復の定期船(乗船時間は約22分)のみとなっている。また、定期船のりば前には、道の駅「みなと」があり、連日多くの観光客が訪れている。大島では、観光客に訪れてもらえるようにPR活動を開始し、2018年夏には交流拠点「大島テラス」が開設され、食堂などの休憩機能および特産物を販売する物販機能を備えている。

3. 各グループによる実施内容

本実習では先述の通り、11のグループに分かれて

大島地区の課題調査を行なった。以下では、各グループの調査内容について報告する。なお、本実習時の様子を写真1-3に示す。

(1) 特産品のブランド化について

本グループは、現在大島で生産されている特産品の現状や課題を把握し、それらの特産品と大島地域との関係性を明らかにしたうえで、認知度向上に向けたプロセスやそれらに対する新しい付加価値の発見及び提案を目的として調査を行なった。調査方法としては、主に関係者に対してインタビュー調査を行い、その調査結果と文献調査を踏まえて考察している。具体的には、大島の生産物である「みかん」と「青のり」を例に、生産過程や流通における特徴の整理、および大島地区近隣の市町の動向と比較して検討・考察を行った。

(2) 大島定期船の潜在的な魅力

大島と本土を結ぶ唯一の移動手段である定期船について、利用者の増加が定期船の便数の確保につながると考え、観光客に離島定期船での移動を楽しんでもらうための定期船の潜在的な魅力について明らかにすることを目的として調査を行なった。

調査方法としては、島民への利用頻度・目的などに関するインタビュー調査、定期船内の利用者行動に関する観察調査、定期船運航会社へのインタビュー調査、道の駅みなと利用客の大島の認知度に関するインタビュー調査を行なった。調査の結果、高齢者以外の世代（島民以外）の大島に関する認知度が低く、定期船ならではの臨場感や非日常感に興味を持つ人が見られた。このように、定期船についても離島である大島の魅力の一つとして位置づけられるのではないかと考察している。

(3) 大島の環境問題

大島における漂流物のプラスチックゴミの実態把握とそれによる島民への影響、および八幡浜市や大島区で実施されている対策について調査し、何故改善されないのかに関する考察を行なっている。

調査方法としては、区長や市役所へのインタビュー調査、および島内5地点の海岸漂流物に関する観察調査である。調査の結果、腐敗や劣化があまり進んでいないゴミが多く見られたことから、島内や八幡浜市本土からのゴミが多いのではないかと考察している。

(4) 島民の生活満足度に関する調査

離島での生活について、実態を調査するため住民の生活満足度に関して調査を行った。調査方法としては島民や診療所の医師、行政関係者にヒアリング調査を

行い、買い物や大島の好きなところや課題と感じている点について質問している。調査の結果、離島ならではの定期船の移動や買物の不便さなどがあるものの、不便さも含め島そのものに好感を持つ意見が多く聞かれたとしている。

また、医療福祉面での課題が明らかとなり、他県の取り組みに関する事例調査から、離島医療を軸に大島に求められる今後の体制について考察した。

(5) 空家問題と活用について

大島地区には宿泊施設が少ないことや、空家が多く見られることを課題として挙げ、空き家の活用について検討を行った。調査手法として、島民や市役所へのインタビュー調査および観察調査、文献調査を行なっている。結果として、現在の空家件数や島民の家族構成などを把握し、空家の増加について推察している。また、女子大生が大島で1日を満喫できるプランをテーマに、大島で見つけた再利用できそうな素材の活用から大島らしいゲストハウスの提案を行なった。

(6) 伝統行事・イベントについて

大島の伝統行事について、概要や実施状況について現状を把握した。また、伝統行事に限らず島内におけるイベントについても同様に概要・実施状況を把握している。調査方法としては、文献調査および大島地区のステークホルダーや島民へのインタビュー調査で情報収集している。その結果、大島での大きな行事としては、お盆行事と秋祭りであり、それぞれ大島ならではの方法、特徴を持っていることが明らかになった。また、後継者の減少が課題であり、行事を継続させるために現在の参加者でできる方法が検討されていることが明らかになった。

行事の中でも夜神楽や牛鬼については、観光資源として利用可能であると感じたが、観光客の受け入れについての島民の是非やその体制づくりの必要性が示唆された。

(7) 大島テラスについて

新しい大島のシンボルとしてオープンした交流拠点の大島テラスについて、オープンから1ヶ月経過した現在の利用状況や、利用者の意見・関心を把握することを目的として調査を行なった。具体的には、テラス利用者やテラス周辺の歩行者（島民や観光客）に対してアンケート調査およびヒアリング調査を実施した。

その結果、大島テラスが島民にとっての憩いの場になっていることが明らかになった。今後、更に島民や観光客などの利用客を維持していくためには、コーヒー等の飲み物に合わせた菓子・軽食の充実など利用

者の意見を取り入れた工夫の必要性について考察した。

(8) 大島の食文化

大島で獲れる食材や郷土料理について、島民30名を対象にヒアリング調査を行った。離島という限られた環境下での工夫や食文化について考察し、「こずなめし」をはじめとした郷土料理を大島テラスにてメニュー化することを提案した。

(9) 大島の防災調査

地震における津波や土砂崩れ等の災害が想定される大島のような離島において、防災および避難の実態を明らかにすることを目的に、避難経路を実際に歩き、避難時間の計測や経路の観察から課題抽出を行なった。

(10) 大島の観光に関する調査

大島に適した観光面からのアプローチについて検討するため、大島への定期船の利用者や定期船乗り場のあるみなと利用者を対象に、アンケート調査を実施し、大島の印象や観光地化に対する考えについて明らかにした。

アンケート調査では、居住地域、大島に行く目的、大島に対するイメージ、大島の観光地化に対する考え、大島にあってほしいモノ等8項目について質問している。調査の結果より、八幡浜市外から来た人よりも、市内住民は大島の観光地化について消極的であり、今後の観光地化については、市内住民へのイメージアップを図りながら観光振興を進めていく必要があると考察した。

(11) 大島の将来ビジョンに関する調査報告

今後の大島の活性化のために、島民が島の将来についてどのように考え、活性化にどれほど積極的なのかについて、島民を対象としたアンケート調査を行った。得られたデータをグラフや表を用いて分析した。調査結果より、住民の考える理想的な将来ビジョンは、自然や第一次産業を活かした対策を行うことにより、観光客、定住者共に増加し、利便性が向上している将来であると考察している。また、今後の対策については、1) 自然を活かしている対策であること、2) 規模は100万円程度、或いはそれ以下、3) 年間観光客増加数が1万人以上、4) 住民参加費は1,000円以下、といった4つの条件を満たすような試みが必要であることを提案した。



写真-1 各グループの調査時の様子



写真-2 各グループの調査時の様子2



写真-3 大島地区での現地発表会の様子（実習最終日）

4. 本実習のまとめと課題

4-1 実習の総括

本実習は学生の関心に合わせて11テーマによる調査を実施したが、これまでに地元関係者や行政が実態把握をされていないものもあり、様々な視点による調査データを地域に提供できたことには意義があると考えられる。

また、本実習の対象地は、離島であるが故の制約があり、現地での滞在期間内に調査を完了して地域で発

表するという行程は、限られた時間で成果を出さなければならないため、チームワークを要する実習となった。調査方法については、主に地域住民を対象にヒアリング調査を実施したものが4グループ、主に定期船関係者や行政、道の駅利用客などにヒアリング調査を実施したものが3グループ、地域住民や道の駅利用客などにアンケート調査を実施したものが1グループ、主に観察調査を実施したものが3グループであった。全てのグループが地域住民をはじめとするステークホルダーや観光客に一度は接触しているが、調査の精度についてはテーマによってばらつきが見られた。

4-2 課題

事前にグループ分けを行い、調査計画を作成してから現地入りしているため、短い滞在時間を有効に使うことはできたが、対象地が遠方であるため、実習当日までの間、全員が大島に一度も行ったことがないという状況であった。そのため、実習一日目に大島に到着してから調査方法を具体化したグループが多く、中には急遽、本土の市役所にヒアリング調査を行なったグループもあった。

また、2泊3日の滞在であるが、定期船の都合上、実質は調査期間および発表準備にかけられる時間は一日半となり、地域のステークホルダーの方々との意見交換会の時間が発表会後にも取ることであればさらに深い考察や提案ができたのではないかと考える。

謝辞

本フィールドワーク実習の実施には、愛媛県八幡浜市大島地区の住民の皆様はじめ、八幡浜市役所、田中輸送有限会社様、道の駅みなとの利用客の皆様など多くの方にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。